

1.17から3.11へ

1995年（平成7年）1月17日早朝、死者6,434人、負傷者43,792人という甚大な被害をもたらした阪神・淡路大震災が発生した。その震災から力を合わせて復興を遂げた神戸市は、今、官民を挙げて東北の復旧・復興に力を尽くしている。どんな思いから神戸の人々は私たちに支援してくださっているのか考えてみよう。

1 神戸市から被災地への支援

下の表は、神戸市から仙台市を含む被災地へ送られた支援の一例である。人的支援、物的支援を合わせて、多くの被災地が励まされ、助けられた。

○神戸市から被災地への職員派遣	
人数の累計	1,874人
延べ人数	24,860人
○神戸市から被災地への物的支援の例	
毛布	17,410枚
飲料水（500ml）	23,760本
アルファ化米	19,600食
紙おむつ	218,510枚
マスク	60,000枚

神戸市危機管理室資料（H26.4.1）より



や水、食料などの確保はすべて自分たちで準備をした。舞子高校の生徒がボランティアに行くと知った他の高校からは花やプランターを届けてほしいという依頼があった。さらに、三週間にわたって行われた募金活動では、小さい子どもからお年寄りまで協力してくれた。「あのときの恩返しをしたいが、体が動かないのでせめて募金だけでも。」と言って千円札を募金箱に入れる人もいた。



被災地での活動の様子

2 高校生，震災と向き合う

全国で唯一環境防災科を持つ神戸市の舞子高等学校の高校生たちも東日本大震災の被災地で活動をしていた。がれきの運び出し、床下にもぐっての泥かき、写真のクリーニング、仮設住宅での茶話会等、自分たちにできることに取り組んだ。被災地に行くに当たっては、現地に負担を掛けないように宿泊場所



神戸市垂水駅前で行われた募金活動

神戸の思い

若林区保健福祉センター家庭健康課（当時）濱 裕子さん
 阪神・淡路大震災から3年後の1998年（平成10年）、神戸市の職員となった。仮設住宅や公営住宅を一軒一軒回って、住民の健康をチェックした。一人暮らしの男性の中には、アルコール依存症の初期症状が見られる方もいた。東日本大震災から1か月後、仙台市に派遣され、仮設住民の健康を後押しする仕事に携わっている。



仮設住宅の集会所での健康教室

「今はまだ慣れることで精一杯です。」と濱さんは控えめに話すが、若林区家庭健康課の及川艶子課長は、「経験や知識が頼りになる。」と述べ、被災者支援のノウハウを持つ神戸市とのパイプ役としても期待する。

仙台市内の避難所運営にも携わった。「物が少ない中でも愚痴を言わず、みなさん我慢強い。だからこそ、つらい思いをため込まないように見守っていきたいです。」と話す。